

京都大学での見聞と交流

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2017年5月31日（水）14:00-20:00

見学場所：京都大学

見学概要

まず、皆が2つのグループに分かれ、京都大学の学生の引率の下で京都大学のキャンパスを見学した。

それから皆は吉田国際交流会館を訪れ、京都大学国際高等教育院の韓立友准教授から京都および京都大学の紹介を受けた。

その後、全団員が4つのグループに分かれ、京都大学の学生と「多文化共生」、「キャリアプラン」、「サブカルチャー」、「大学の在り方」の4つのテーマに沿った討論を行った。討論の後、KUINEP 講義室で各グループが討論結果の発表を行い、京都大学の教授からのコメントを頂いた。

最後に、皆はカンフォーラでの交流会に参加し、食事をしながら楽しい交流を行った。また京都大学の学生からは出し物の披露があり、訪日団からは歌の披露があった。そして程海波団長からの閉幕の挨拶により、京都大学での活動は滞りなく終了した。



なぜですか？

(1) 京都大学には「吉田寮」という宿舎があり、学生が自主管理を行っている。京都大学は学生の意向や権利を非常に尊重している。学生が自主管理をしている「吉田寮」に関して、老朽化の問題から大学側が改築を望んでいるが、学生がそれを拒んでいるため、強硬な工事ができないことから大学側も学生と交渉を続けており、改築作業も全く進んでいない。



(2) 日本における物理、化学、生理学・医学関連の初のノーベル賞受賞者はいずれも京都大学から誕生している。京都大学の自由な校風は本当に感心させられるものであり、自由で革新的そして反抗的でもある。校門前には首相打倒の看板が立てられており、京都大学の学生はかつて学長や警察を打倒したことがあるという。またその自由で革新的な校風から研究であれ学習であれ、自身の興味や趣味が基になっている。そして教授も科学研究ではなく

教育を念頭に全人類のため教師として人材を育てている。その他、京都大学の学生との討論においては、彼らの英語のレベルが想像以上に素晴らしかった(中国では日本人の英語はあまり上手ではないという話をよく耳にするが、実際はそうではなかった)。また日本の学生はとても親切で、交流の際もとても楽しそうであった。

(3) 日本の国立大学にはこれまで学生の募集に関する不祥事がなく、制度を厳しく守り、すべての学生を平等に扱っている。日本の大学の学長は選挙を通じて選ばれるが、学長を希望する人はさほど多くない。

感想

京都大学に着いてすぐ、ここは中国国内の大学とは違ったものだと感じた。ここには特別立派な校門はなく、しかもその校門前には「反動的言論」が書かれた看板が立てられ、キャンパス内のポスターの多くも学生が書き殴ったものであり、これまで接したことのない感覚であった。

また京都大学の学生との交流においても、日中両国の若者の考え方の違いを感じることができた。私たちのグループの討論テーマはサブカルチャーであったため、私たちは「ネット有名人文化」、モバイルゲーム、テレビドラマ文化等のサブカルチャーについて議論をした。そして議論の際、日本の学生の考え方の中国の学生との違いを感じることができた。例えば、中国の学生が「ネット有名人」の話の際に、ネット有名人の彼らは少し名前が売れるとタオバオでのネットショップ経営をするといった話をしたところ、日本の学生はそれを不思議に思い、「洋服のデザイン、品質、ブランド、店舗はどうなのか?」といった質問を受けた。こうした些細なところから、両国の若者の文化や思想面の違いを感じることができた。

その他、韓立友准教授による京都および京都大学の紹介を聴いた私は、京都大学に留学したい思いが芽生えた。京都大学は独立独歩で、自由を尊重している。京都大学の自由性と革新性、そして教授の教育第一の精神には本当に感服させられた。京都大学の学生は政治に対して自身の見解を持ち、それらは外部の影響を受けることはない。また学生は就職ではなく自身の興味に基づいて学習をしている。これらは一流の学者の育成により有利であることは推して知るべし、である。学生の個性が尊重されるほど物事への新たな見解が形成される、これは社会の発展に必要なものである。そして教授が教育を重視する点に関しても私たちが学ぶべきものであり、大学の教授は、学生が社会に足を踏み入れる前における学生に大きな影響をもたらすことのできる最後の存在と言え、真剣に教育を行う教授は、学生に自分の仕事への情熱と他人への思いやりを示すものであり、学生も自然と自分のすべき物事へ真剣に接するようになる。京都大学の教授は科学研究よりも教育を重視しており、全人類のため教師として人材を育てている。これには中国国内の教育体制について改めて考えずにはいられなかった。